特集１　東日本大震災３
被災図書館の取り組み

【再開された野田村立図書館】

3 月 11 日の東日本大震災から 1 年半がたち、沿岸市町村の図書館も、全国からの図書館支援プロジェクトや多くのボランティアの支援を受け、立ち直りつつあります。

県内図書館の対応については、前回と前々回の館報で震災の当日の様子や各図書館の取り組みを報告していただきました。

今号では開館を果たした野田村立図書館、公民館図書室から再出発した大槌町立図書館、寄贈されたログハウス図書館から出発する陸前高田市立図書館の３館から復興への取り組みを報告します。

野田村立図書館

開館までの歩み

野田村立図書館は、蔵書約２万冊の小さな図書館で、震災前から多くの関係者のご協力をいただきながら運営している図書館です。

利用状況

年度	開設日数	入館者数	貸出冊数
H22	323	9,506	6,209
H21	353	11,333	8,312
H20	353	12,053	8,589

※H22 は２月末の集計数値である

昨年の３月 11 日に発生した「東日本大震災」では、野田村の地震の強さは震度５弱と他の被災地に比べ小さく、地震そのものの被害は少なかったのですが、津波により壊滅的な被害を受けました。図書館内部も約 1.7 メートル浸水し、書架は倒され、蔵書のほとんどが海水に浸かり、壊れた窓や壁からは付近にあった自動車が入り込むなど、見るも無残な状況でした。

当初は瓦礫の山や行方不明者の捜索で建物に近づくこともできませんでした。

図書館周辺の状況

また、次から次へと運ばれてくる支援物資の受け入れや避難所対応など、図書館のことはとてもできる状況ではありませんでした。実際は、できないというよりは、何をどうしたらよいか分からず途方に暮れていたと言う方が正しいと思います。

そのような中、付近の瓦礫の片付けも進み、ボランティアの皆さんの協力で図書館の片付けも進んできた時、ボランティアの方から、資料の保存のお手伝いをしたいという申し出がありました。その時「これだ」と思いました。まず何をするべきか気付かされた思いがしました。その方々からは２日間、主に写真資料などの応急処置をしていただきました。

被災直後の図書館内部

その後、国立国会図書館及び岩手県立図書館の職員の皆さんの訪問があり、同行していた修復師の方が、そのまま資料保存のため２日間残って応急処置をしていただいたということもありました。

修復師による応急処置

後で伺ったところ、資料保存の手伝いを申し出たボランティアの方とはお知り合いということで、大体の状況は聞いていたということでした。

その後、被災した本の中から村にしかない資料や古い本などを選別し乾燥させる作業をしていました。限られた人数で、ボランティアへの指導もままならない中、梅雨の時期が来てしまうとカビの心配があることから、早急にどうにかしたいということで県立図書館へ相談したところ、関係機関への協力要請や日程調整を

していただけることになりました。そして５月30 日から６月２日までの４日間、資料保存作業と全国から寄せられた寄贈図書の仕分け作業をしていただきました。

保存資料のクリーニング作業

その他にも、近隣市町村からは、図書館車の巡回や野田村民の図書館利用を認めていただきました。国会図書館からは、本格的な資料の保存・修復作業をしていただいたり、県立図書館では何度となく状況を確認に来ていただき、支援の調整をしていただくなど、本当に多くの温かいご支援をいただきました。

お陰様で、当初の予定よりは遅れてしまいましたが、今年５月 21 日に再開することができました。村民の方から「図書館はいつからですか？」と何度となく聞かれるなど、待ちに待った再開でした。再開後も「待ってたよー」と利用者の声を聞くたびに「ホッ」としています。

書架の配置や本の配架なども多くの皆様からアドバイスや協力をいただきました。

再開後の図書館内

また、図書館の復旧にあたり、震災前からの計画であった「学習スペース」の増築工事も実施しました。その際も児童書の寄贈が多いことから、学習スペースではなく小さい頃から本に親しむ場を提供するという意味で「児童スペース」にして、親子で気軽に来てもらい、そこで読み聞かせを行うなどの展開を考えてはどうかというアドバイスをいただき、変更したということもありました。

児童スペース

このように、多くの皆様の支援や想いにより再開できた図書館です。どなたでも利用できますので「みんなの図書館」と思ってお気軽に利用していただければ幸いです。

月別利用者数

年度	６月	７月	８月
H24	550	720	1,022
H22	813	1,022	1,074

今後は、大人向けの蔵書の充実と復旧・復興が進む中、被災により再認識された「本」の重要性について、その気持ちが薄れないよう、震災により、より強くなった関係機関との「繋がり」で事業展開等していきたいと考えています。

（野田村教育委員会生涯学習文化班
総括主査　小谷地　鉄也）

大槌町立図書館

たくさんの橋をかけよう

～図書業務の再開まで～

１．はじめに

大惨事。そして図書館も消えた。建物の倒壊は免れたものの、蔵書は流失しその機能を失ったのである。

３週間後の４月、多くの職員を失った役場は、副町長を頭に新たな体制を敷いた。図書業務も生涯学習課職員に兼務発令された。とはいっても、図書業務があるわけでも、できるわけでもないのだが。

図書館長は、教育委員会生涯学習課長が兼務であった。その生涯学習課は、避難所運営の統括。最大で 44 カ所あった避難所を、とにかく回って、御用聞きもあれば、物資搬入或いはトラブル対応で忙殺された。

2012 年 7 月 10 日図書館の解体

仮設住宅建設が進む中、避難所閉鎖の時期も視野に入ってきた。４月以降、各避難所には役場 OB 職員を配置、加えて緊急雇用が使えたことでお世話係の非常勤職員を置くことができた。もっとも、避難所ごとに自治組織が機能してはいたが、この方々がいなければ、献身的な取り組みがなければ、あれほどまでに円滑な運営は難しかったはずである。仕事だからと云われればそれまでだが、ただ時間をやり過ごすことではない、相当に濃い時間がそこにはあった。

２．図書業務再開に向け

町の中は瓦礫。個人的には、この瓦礫という表現、受け入れたくはないのだが、とにかく瓦礫。そしてやがてそれらが取り除かれるとコンクリートの基礎。そこにはついこの前まで家があり、人々の暮らしが営まれていたところ。そして、確かな明日に向けて努力の日が続いている。

働き盛りの大人でさえ、希望喪失に陥っても不思議ではない現状。お年寄りや子供たちはどうであろうか。仮設校舎が完成し、スクールバスは、その瓦礫のまちを、コンクリートの基礎しか残っていないまちを走る。車窓に広がる荒涼とした「光景」を否応なしに眺めながら、子供たちは通学しているのである。

復興基本方針に、次のような文言がある。

一人でも多くの子どもたちが将来に大きな夢や希望を抱きながら、自らの生き方を主体的に切り拓く「生きる力」を身に付け、自分の目標を実現し、ふるさと大槌を創生する担い手となることを望みます。

車窓の向こうに、夢や希望を容易く描けるであろうか。

被災した図書館でスクラップを整理する
都留文科大学の学生たち

３．たくさんの橋がかかりますように

子供達に本を届けようと思った。本を集めて届けることが大事だと思った。しかし、生涯学習課は避難所統括が第一義の業務。けれども、本を集めた。ひょんなことから北上在住の女性がラジオを通じて呼びかけてもくれた。本が届くと、「置くところがない」「本どころではない」、そういう声が職員から発せられた。８月 11 日、すべての避難所閉鎖の期限として見えてきた。避難所にいた臨時職員、避難所の後始末が終わってからすべて生涯学習課に職場を移していただいた。図書の整理をするためである。ほどなく貸し出し業務を仮設住宅の集会所で開始することができ、順次場所を増やしてい

くことができた。すべては、緊急雇用の臨時職員がいたからこそできた業務である。

仮設住宅集会所での移動図書を開設できたのは
震災から５ヶ月過ぎた

「橋をかける」という本がある。皇后陛下のご執筆になる。現在は八幡平市に住まいする末盛千枝子さんがかつて出版されたもの。その末盛さんが代表の「いわて絵本カープロジェクト」。被災地の子供たちに絵本を届けるというもの。その第一号の車を大槌町が頂戴することができた。たくさんの本に巡り会われた皇后陛下は、本を読むことによって知らない誰かに巡り会えること、知らない場所につながること、そのことを「橋をかける」と表現された。絵本カーが届いた折、末盛さんから心強いメッセージをいただいた。「たくさんの橋がかかりますように」と。

４．多くの支援をいただいて

JICA（独立行政法人国際協力機構）から、図書館司書の資格を持つ職員を一名派遣していただいた。やるべきことが岩手山を凌ぐほどに山積していた。図書館業務経験はなかったものの、それらを日々処理していってくれた。そして避難所から職場を生涯学習課に移した方々の業務管理までも引き受けてくれたのだ。

新装になった城山図書室の児童コーナー

ユネスコを通じてニッセンから移動図書館を頂戴した。富士通システムからコンピュータシステムの供与を受けた。県立図書館をはじめ各地図書館からの支援、滝沢と花巻は移動図書館、シャンティ国際ボランティア会の図書業務など、すべてはここに表しきれないほどである。改めて感謝したい。

図書館がなかった頃、図書室と利用していた部屋は、警察の詰め所として利用され、その後は他県から応援できていた警察官の休憩所兼宿泊所と化していた。やがて空き部屋になり、そこでの図書業務再開へ大きく舵が切られた。図書業務の人たちがいてくれたおかげで、今年６月１日、新たに「城山図書室」としてオープンへこぎ着けた。

6 月 10 日にオープンした城山図書室
利用者カードにハマギク

書棚に手を伸ばして自分の意思で本を選べる。そういう場所が提供できるようになった。今は、そういう場所ができたということだけでも、素直に喜んで欲しい。本を選ぶことで、本を読むことで、ちっぽけな夢かもしれないが、わずかな希望であるかもしれないが、大きなものにして欲しい。

利用率のことなど問題にすまい。今はまだそういう評価を求めるような状況ではない。現場はまだ、終わっていない。

（文責：大槌町立図書館長　佐々木　健）

陸前高田市立図書館

復興への取り組み

2011 年 3 月 11 日、この日、当図書館は東日本大震災により全壊し、館長以下職員 7 名の尊い命と蔵書約 8 万冊（うち郷土資料約 6 千冊）を失いました。

市教育委員会でも、業務をしていた市民会館が全壊、教育長以下多数の犠牲者が生じました。このため平成 23 年度中は、ほとんどが応援職員という生涯学習課内で、図書館運営が手探り状態で行われました。

被災後すぐ 4 月に、遠く滋賀県東近江市より移動図書館車「やまびこ号」が図書 5000 冊を積載して届けられ、7 月より市内を運行しました。

その後、図書館振興財団の支援を受けて、プレハブ 2 階建て（68 ㎡）の仮設図書館が今年 3 月に完成しました。

はまゆり号の学校での利用風景

平成 24 年 4 月に、現市職員のうち唯一図書館勤務経験のあった職員 1 名、嘱託職員 3 名、臨時職員 3 名（6 月から 3 名増員）が配属され、図書館の機能復旧に向けて始動しました。

まず手掛けたのは、前年度中に全国から寄贈された図書の選書、登録作業です。1 冊 1 冊汚れをとり、バーコードシールを貼り、データをダウンロードして登録し、ブックカバーフィルムをかけました。図書館システムは復旧したものの、蔵書はすべて流出か、流出を免れたものも汚泥により使用不可となりましたので、蔵書登録はゼロからの出発でした。

6 月には、イタリアからの支援による、震災前と同じ型の移動図書館車が納車になる予定でしたので、当面の目標はその積載冊数を登録することでした。

建設の際掲げていたメッセージ横断幕

北海道ブックシェアリング寄贈のログハウス建設風景

しかし、図書館システムも、開発した市内業者の社長が津波の犠牲になりましたので、担当社員も手探り状態でした。図書館とシステム会社とで何度も打ち合わせをしながらの登録作業でしたので遅々として進まず、急遽ブックカバー貼りのボランティアを募ったところ、市内はもとより県内、県外、遠くは東京や埼玉、愛知からたくさんの方に支援に来ていただき、やっと 7 月からの移動図書館車の運行に間に合わせることができました。

しかし震災前と状況が一変し、仮設住宅や被災したため場所を移動した学校や保育所、会社などがありましたので、移動図書館の運行計画の作成には大変難儀しました。

その後、北海道のボランティア団体から思いがけず、一般閲覧室となるログハウス一棟（約 50 ㎡）の寄贈の話があり、８月末に着工し９月には完成しました。現在は一般貸出の再開に向けて準備作業の毎日です。

ログハウス完成

現在の仮設図書館は、旧図書館から５キロも離れた隣町にあり、交通の便もないので、どのくらいの利用者があるのか、利用者層がどのようになるのか、どのようなリクエストがあるのか不安材料は多いのですが、小さいながらも市民の皆さんが落ちついて本が読める環境を提供し、潤いを持ち、心豊かに暮らすためのお手伝いができればと考えております。

陸前高田市立図書館の建設は数年先です。それまではこの北海道の木の香りがする小さなログハウスの図書館が市民の憩いの場となり、小さいながらも大きな情報の発信地として、知りたい、学びたいという希望に応えていきたいと思います。

また今後の課題としましては、市内には震災を機に NPO 法人うれし野こども図書室分館「ちいさいおうち」、にじのライブラリー、陸前高田コミュニティー図書室とさまざまな団体が運営する図書室が出来ております。

プレハブでの準備風景

これらの図書室と連携をとり市民の皆さんの利用に供していくこと、震災により失われた郷土資料を後世に引き継ぐため早急に収集すること、震災により汚泥をかぶった郷土資料・古文書等の修復状態の確認作業、引き続きの図書の登録作業等たくさんやらなければならないことが山積しています。

最後になりましたが、全国のたくさんの団体・個人の皆様よりご支援をいただきましたことにこの場をお借りして感謝申し上げます。

やまびこ号とはまゆり号とプレハブの仮設図書館

（陸前高田市立図書館
副主幹　長谷川　敬子）